

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：12613

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870202

研究課題名(和文)19-20世紀転換期スウェーデンにおける生活文化をめぐる諸運動と「国民教育」

研究課題名(英文) Swedish welfare state and improving living environment as informal national education

研究代表者

太田 美幸(OHTA, Miyuki)

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授

研究者番号：20452542

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：国民の高負担のうえに成り立つ福祉国家は、強固な国民意識なしには維持できない。それはいかんにして形成されてきたのか。本研究ではこの問いについて、生活環境への働きかけによって国民意識の形成を目指した諸運動(景観保存運動、ヘムスロイド運動、近代デザイン運動、「社会美」運動等)の展開とそれを支えた思想から検討した。これらの担い手は社会民主主義運動にも関与し、民衆教育運動を媒体として国民の「良き趣味」の形成に取り組んでいたことが明らかとなり、ここから、現代に継承されているスウェーデンの日常物質文化(特に国際市場で高い評価を得てきた産業デザイン)と福祉国家体制との理念的なつながりの一端が把握できた。

研究成果の概要(英文)：In a welfare state such as Sweden, people need to bear the high cost to maintain social services, and it is essential that people have the sense of nationality. This research aimed to trace how it has been developed, focusing on some movements that sought to improve living environment. The local heritage movement, the handicraft movement, modern designs and architectures and the philosophical movement called "socialestetiska rörelse" (in Swedish) had mutually ideological connections and converged on the social democratic movement. Improving "taste" became one of the political agenda and accelerated through popular education. Folkhemmet, a political concept of the Swedish welfare state, means the vision that the entire society ought to be like a small family, but it also means that the foundation of Swedish welfare state was each home. Modern people with "good taste" were to be nurtured through dwelling with the beauty that rooted in the traditional local landscapes and cultures.

研究分野：教育社会学

キーワード：スウェーデン 生活文化 近代デザイン 日常物質文化 国民教育 国民形成 社会美

1. 研究開始当初の背景

国民の高負担のうえに成り立つ福祉国家は、強固な国民意識なしには維持できない。それはいかにして形成されてきたのか。スウェーデンにおける福祉国家形成の社会的背景を明らかにした石原俊時は、社会民主主義のもとでの国民統合は、1880年代より本格化した「国民運動」とそこで育まれた労働者文化の産物であったことを指摘している(石原俊時(1996)『市民社会と労働者文化—スウェーデン福祉国家の社会的起源』木鐸社)。石原の研究では労働者文化の形成に大きな役割を果たしたものとして、ノンフォーマルな民衆教育の重要性が示唆されている。「国民運動」の内部で成熟した民衆教育は、20世紀前半に現在まで続く強固な組織的基盤を形成し、一貫して高い参加率を維持してきた。民衆教育の運動は、制度を整えつつあったフォーマルな学校教育とともに、福祉国家を支える国民の形成に寄与してきたといえる。

他方、19-20世紀転換期の文化史を見てみると、国民運動の活性化と同時期に芸術文化の領域においても大きな転換が起こっていたことが注目される。北欧の近代建築を研究する川島洋一は、スウェーデンにおいてこの時期に広がっていた「ナショナル・ロマンティズム」の思潮を、ヨーロッパの中心に位置する国々の「近代性」を吸収することで自らの「後進性」を克服し、かつそれを自国流に翻訳して消化することによって独自の文化的価値を確立する道を模索するものであったと解釈している(川島洋一(1996)「スウェーデンの近代的住宅像形成過程におけるカール・ラーション自邸の意義」『デザイン理論』第35号)。

こうした思潮は、イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動の影響もあってほどなく住環境美化への関心に結びつき、近代的な生活スタイルに伝統的なモチーフを取り入れた住居が理想的な住まいとして人々の憧憬的となった。スウェーデンにおける建築史・デザイン史研究の知見によれば、こうした動きを主導した芸術家や建築家、デザイナー、社会批評家たちの中には、文化的

景観や日用品の造形を通じて人々の感性をある方向へと導こうとする意図を明確にもっていた者も存在した。このような状況は、同時代のドイツで進行していた生活改革運動や日本における社会教育的な生活改善運動と通ずる性質をもっていただろうではないか。これが本研究における初発の問題意識であった。

2. 研究の目的

本研究は、スウェーデンにおいて福祉国家を支える国民意識がいかにして育まれてきたのかを、福祉国家形成期以前に展開した、生活環境をつくりかえることによって国民意識の形成を目指した諸運動(インフォーマル(非定型的)な「国民教育」)の検討を通じて明らかにすることを目的とした。同時に、学校教育を中心とする近代教育システムの周縁に広がる教育活動の諸相に焦点を当て、ノンフォーマル教育およびインフォーマル教育(形成環境=生活環境への働きかけ)をも含みこむ「国民教育」システムを描き出すための枠組みを構築することを目指した。

3. 研究の方法

生活環境をつくりかえることによって国民意識の形成を目指す諸運動を、インフォーマル(非定型的)な「国民教育」とみなす捉え方は、比較教育学者のユルゲン・シュリーヴァーらが提唱する「儀式としての教育」概念をふまえたものである(シュリーヴァー(2012)「儀式による教育—革命(後)社会における公共空間での演出と感性論的な意識形成」『<教育と社会>研究』第22号)。「儀式による教育」とは、国家が大衆を国民として形成していくために、「公共空間の演出」を通じておこなった「国民教育」、すなわち「政治・道徳的な行動様式の伝達」を指している。シュリーヴァーによれば、「儀式による教育」は、新しい社会の実現に向けて国民意識の形成が喫緊の課題とされた場面で、公教育としての近代学校とともに国民形成の手段として実践されてきた。

さらに、本研究では、ミュージアムにおける陶冶 (Bildung) の過程を論じてきたドイツの教育学者ミハエル・パーモンティエが提唱する「ミュージアム・ペダゴジー」の概念にも注目した (パーモンティエ (2012) 『ミュージアム・エデュケーション—感性と知性を拓く想起空間』慶應義塾大学出版会)。彼はミュージアムを「教育学からないがしるにされてはいるものの、近代の陶冶施設として学校を補完してきた」ものとし、ミュージアムにおける陶冶過程においては、文字の読み書きではなく「モノ記号」あるいは「モノの存在の文法」の読解能力が鍛えられ、それによって自己を刷新していくことが可能となるとする。展示物 (モノ) を何らかの意味内容を表す記号とみなし、言語を介した直接的教育ではなく、記号としてのモノを介した間接的教育の作用に注目するのが「ミュージアム・ペダゴジー」の特徴であるが、先に見たシュリーヴァーの議論をふまえれば、その射程はミュージアムの展示物に限定されるものではなく、文化的景観や日用品といった日常生活の物的環境 (日常物質文化) 全般に広がっていると考えられる。

本研究ではこうした視角にもとづき、福祉国家形成期およびそれ以前のスウェーデン社会において展開された文化的景観や日用品の造形をめぐる諸運動を「公共空間の演出」として捉え、そこに関わった各アクターが、物的環境がもつ教育作用をどのように認識し、どのような具体的イメージを用いてきたのか、そこにいかなるイデオロギーが内在していたのかを明らかにすることによって、この時期の「国民教育」の一端を描き出すことを目指した。

対象となる諸運動に関する文献資料の多くは、ストックホルムの北欧博物館 (Nordiska museet)、および王立図書館 (Kungliga biblioteket) で閲覧・収集した。そのほか、スウェーデン各地の郷土博物館や野外民俗博物館等に所蔵されている住宅や日用品の造形に関する史資料、文化的景観の変遷を示す画像資料なども参照した。

4. 研究成果

本研究の成果は単著として出版の準備を進めているが、その概要は以下のとおりである。

現在のスウェーデンは豊かな福祉国家として知られているが、20 世紀の初めまではヨーロッパの周縁に位置する貧しい国の一つにすぎなかった。19 世紀後半から 20 世紀初めにかけて全人口の 5 分の 1 を超える人々が主に北米へと移住するなかで、国家を支える国民意識を醸成することの重要性が切実に認識されるようになったが、その際、スウェーデンの国家的なシンボルとして注目されたのが、農村における豊かな自然と、そこで継承されてきた生活文化である。農村の風景は古代からの民族精神と結びつけられ、称賛され愛好されるようになった。陽光あふれる手つかずの自然と素朴な田舎の景観が「スウェーデンらしさ」を象徴するものと認識されるようになったのは、これ以後のことである。同時に、スウェーデン社会は、迫りくる変化に立ち向かい新しい社会秩序をつくっていくことを課題としており、ナショナル・ロマンティズムと近代化とが独自の融合を遂げながら発展していくこととなった。

その展開の特徴を示す事例として、1891 年にスウェーデンの首都ストックホルムに開設された「スカンセン」が挙げられる。スカンセンは、伝統的な農村の景観や民家、日常生活で用いられた道具を保存あるいは再現して展示するのみならず、その空間のなかでかつての労働や娯楽活動なども再現することによって、ナショナルな帰属意識と伝統的な農村生活へのロマンティズムを喚起することを目指してつくられた世界最初の野外民俗博物館である。スカンセンは開園当初から人気を集め、現在の年間入場者は約 140 万人にのぼり (スウェーデンの総人口は約 980 万人)、各種イベントはテレビ中継もされている。スカンセンの開園とほぼ同時期に、各地の農村でも景観保存運動が活性化し、その活動拠点として郷土庭園や郷土博物館が次々と設立された。現在、スウェーデン国内には 1300 を超える郷土庭園が存在し、そのほとんどが地元の景

観保存協会によって運営されている。各地の景観保存協会の連合組織として 1916 年に設立されたスウェーデン景観保存連盟の会員総数は 45 万人にのぼり、毎年延べ 500 万人が各種イベントに参加している。この運動の展開とともに「自然を愛するスウェーデン人」という自己イメージが定着したと考えられる。哲学者の桑子敏雄は、あるコンセプトのもとで新たにつくりあげられた空間を「コンセプト空間」とみなし、その中で人間の身体がコンセプトに適合するように調整されていくことを指摘しているが(桑子敏雄(2001)『感性の哲学』日本放送出版協会)、野外民俗博物館や郷土庭園はまさしく「伝統」をコンセプトとしてつくられた空間であり、風景と道具による人間形成作用を意図した「近代の陶冶施設」(パーモンティエ)であったといえる。

類似の性格をもつ運動として、1870 年代に始まり徐々に規模を拡大したヘムスロイド運動が挙げられる。農村の伝統的な美的価値を守ろうとした女性たちが、工場で大量生産される安価な製品が出回ることによって代々受け継がれてきた生活文化の「趣味」が破壊されることに抵抗し、昔ながらのヘムスロイド(手工芸による日用品の製作)を復興させようとしたものである。これに呼応して、ラスキンやモリスの思想を受容した社会批評家・教育思想家のエレン・ケイが、美とは伝統的な農村の生活にこそ見出せるものであると主張した。ケイがインテリアについて書いた『家庭の美』(1897 年)は DIY のマニュアルともいいうる内容で、人口約 500 万の当時のスウェーデンにおいて約 2 万部が売れた。また、ナショナル・ロマンティズムを代表する画家カール・ラーションが自邸のインテリアとそこでの近代的な家庭生活を描いた画集シリーズも人気を博し、特に著名な『ある住まい』(1899 年)は、発行部数は不明だが 1917 年までに 6 版を重ねた。これらに示されたインテリアの実例と視覚イメージが、後のスウェーデンにおける「理想の住まい」像のルーツとなっていることは、現代のインテリアの実状を見れば明らかである。

さらに、ケイは生活環境を美化することによる社会改良(「社会美」構想)をも提唱し、当時台頭しつつあった社会民主主義運動の指導者と連携して言論活動を展開していたが、とりわけ民衆教育を通じて社会美の思想を普及させることに力を注いだ。当時はスカンセンの活動もまた民衆教育の一環であるとみなされており、ケイも個人的に支援をおこなったことが記録されている。他方、景観保存運動の指導者たちも社会民主主義運動に深く関与していた。景観保存の理念は、直接的には社会民主主義と結びつくものではないが、両者のつながりは後のスウェーデンにおける福祉国家形成の展開を読み解くうえで一つの鍵となる。当時、新たな社会秩序の形成を目指した新興市民層や知識人らは、大國時代の記憶を拠りどころとして旧来の体制を維持しようとする保守派との対立を深めていた一方で、労働者層の支持を集める社会民主主義勢力との協力関係を構築しつつあった。かれらが農村に伝わる生活文化を称揚したのは、「戦争ナショナリズム」ともいべき保守派の方針に対抗し、民主的な社会をつくっていくための戦略であったが、こうした方針が社会民主主義運動にも共有され、「スウェーデンらしさ」を称揚する文化運動と、福祉国家建設を目指す社会民主主義運動とが、一種独特の協力関係をつくりだすことになったのである。

カール・ヴェストマン、ラグナル・エストベリ、グレゴール・パウルソンなど、20 世紀前半に活躍した建築家や美術関係者のなかには、自らがケイの思想を継承していることを明示している者もいる。かれらは政権を掌握した社会民主党と連携し住宅政策の立案過程に影響を及ぼしただけでなく、製造業者と協力しながら日用品のデザインの改良や販売ルートの拡張にも努めた。現在国際市場できわめて高い評価を得ているデザインの多くは、この時期に誕生したものである。また、かれらが展開した「社会美」運動では、既存の民衆教育組織を活用した啓発活動も重視された。総じて、景観や日用品の造形による人間

形成環境の設計(インフォーマルな教育的働きかけ)と、民衆教育の既存組織を活用したノンフォーマルな教育が展開されていたといえる。それらにおいては「近代的で調和のとれた住環境は、近代的な人間を育てる」という理念が貫かれ、労働者の住環境の刷新を通じた近代的個人の育成が目指されていた。長期政権を担った社会民主党もまた、それを共有していた。1920年代に社民党が打ち出した福祉国家戦略、すなわち「国民の家」構想において、「家」とは単に国家の比喩ではなく、福祉国家形成の拠点としての「家庭」をも意味し、快適な住宅は市民の権利であり、国民形成の基盤でもであるとされた。また、住まいを快適に整えるための「良き趣味」をすべての国民が身に付けることも重視され、そのための教育活動に力が入られたのである。

なかでも重要な役割を果たしたのは、各種の民間団体が展開した消費者教育運動であったと思われるが、その具体的な様相については、本研究では調査することができなかった。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

丸山英樹・太田美幸・二井紀美子・見原礼子・大橋知穂、公的に保障されるべき教育とは何か—ノンフォーマル教育の国際比較から、教育と社会 研究第26号、2016年、63-76頁(査読無)。

太田美幸、住環境の文化史から 近代の人づくりを読み解く、教育と社会 研究第 25 号、2015 年、63-76 頁(査読無)。

〔学会発表〕(計 3 件)

太田美幸、スウェーデンにおける「社会美」の思想と「国民の家」、唯物論研究協会第38回研究大会、2015年10月17日、群馬大学、群馬県前橋市。

太田美幸、スウェーデンの近代化過程におけるミュージアム・ペダゴジー、北欧教育研究会、2015年7月11日、新潟大学、新潟県新潟市。

太田美幸、スウェーデンにおける生活文化をめぐる諸運動と「国民の家」構想、唯物論研究協

会比较社会研究部会、2015年3月30日、一橋大学、東京都国立市。

〔図書〕(計 3 件)

サーラ・クリストフフェション著、太田美幸訳、新評論、イケアとスウェーデン 福祉国家イメージの文化史、2015年、314頁。

青木利夫・柿内真紀・関啓子・木下江美・三浦綾希子・呉永鎬・藤田明香・太田美幸・見原礼子・高尾隆・金子晃之・神谷純子、東信堂、生活世界に織り込まれた発達文化 人間形成の全体史への道、2015年、260頁(152-173頁)。

木村元・神代健彦・藤田和也・前田晶子・山田哲也・松下佳代・渡辺貴裕・福島裕敏・中田康彦・松田洋介・小玉亮子・中澤篤史・太田美幸・小玉重夫、医学書院、系統看護学講座基礎分野 教育学第7版、2015年、264頁(233-244頁)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 美幸(OHTA, Miyuki)

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授

研究者番号:20452542